

新ペゴニア温室の植栽状況について

高田有紀子・大嵯 忠

新ペゴニア温室は、平成7年6月30日から建設工事が行われ、平成8年3月15日に完成、同年11月2日に開館した。球根ペゴニアを中心に木立性ペゴニアや根茎性ペゴニア及びそれら園芸品種のもとになった原種など、約800品種、1,900株を展示した。

温室内は、従来のペゴニア温室に比べて通路が広く、また写真を撮れるスペースや休憩所ともなるベンチを設けるなど、来園者にゆっくりと植物を觀賞していただくとともに、くつろげるように配慮した。

概要

面積は625㎡（展示室344㎡、育苗室118㎡、機械室及びその他163㎡）である。温室は鉄骨アルミサッシガラス張りで、東側と南側の出入り口には、結露防止のため、風除室を設けている。天窗は自動開閉式である。また、ガラスの内側にシルバーのダイオミラー（ダイオ化成、50%遮光）を張っている。更に、電照用の電球には、ナトリウムランプとマルチハロゲンランプを使用し、計35灯を取り付けている。

1 展示状況

展示室では、分類と目的に応じて以下のような7つのコーナーを設け、各々解説版を備えて種々のペゴニアを展示した（図）。



写真1 新ペゴニア温室の外観

A 球根ペゴニアコーナー

球根ペゴニアは、南米アンデス山脈の標高1,000~4,000mの高地に自生する7種の球根性ペゴニアをもとに複雑に交配を重ねて生まれた園芸植物である。このコーナーには、本温室の育苗室で育苗したスタンドタイプを約300株展示した。

B 木立ち性ペゴニアコーナー

直立する茎を持ち、地下に球根を作らないペゴニアである木立ち性ペゴニアを約100株展示した。

C 根茎性ペゴニアコーナー

茎が地表を這うように伸びて生育する根茎性ペゴニアを約60株展示した。

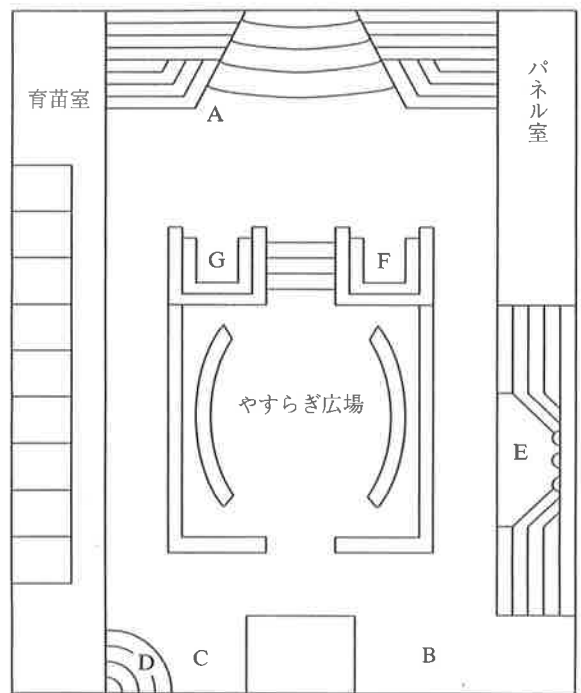


図 ペゴニア温室平面図

- A：球根ペゴニアコーナー
- B：木立ち性ペゴニアコーナー
- C：根茎性ペゴニアコーナー
- D：レックス・ペゴニアコーナー
- E：原種コーナー
- F：植物公園オリジナル品種コーナー
- G：組織培養で殖やした球根ペゴニアのコーナー

D レックス・ベゴニアコーナー

レックス・ベゴニアは、インドのアッサム地方原産の野生種、ベゴニア レックス (*Begonia rex*, 和名;オオバベゴニア) をもとにして作り出された品種群の総称である。このコーナーには約70株を展示した。

E 原種コーナー

ベゴニアの原種は、オーストラリアを除く世界の熱帯、亜熱帯地域に分布し、その数は約2,000種余りといわれている。本園では、約200種の原種を収集しており、それらのうち約120種、約150株を原種コーナーに展示した。

中でも注目を浴びたのは、球根ベゴニアの原種であろう。球根ベゴニアの原種は、南米アンデス高地に自生する7種とされているが、ここではそれらのうちの3種を展示した(写真2)。これらはすべて花が一重で小さく、いかにして現在みられるような大輪の園芸品種が生まれたのだらうと不思議に思うほどである。また、他の球根性ベゴニアや木立ち性ベゴニア、根茎性ベゴニアの原種についても、特に重要な種については解説を加えた。

このコーナーは、コンクリートの雑壇の間に砂を盛り込んだ一画があり、そこでは鉢を土に埋め、地植え風に見せて、種々の原種を展示した。

F 植物公園オリジナル品種コーナー

大岩がこれまでに当園で育種した木立ち性ベゴニアを10品種、約80株展示した。



B. boliviensis



B. cinnabarina



B. pearcei

写真2 ベゴニアの原種

G 組織培養で殖やした球根ベゴニアのコーナー

球根ベゴニアは、一般には栄養繁殖が困難であるため、当園では数年前から組織培養による増殖を検討している。その結果、増殖に成功したハンギングタイプの球根ベゴニアを約25鉢展示した。

これら7つのコーナーとは別に、通路沿いの棚には、球根ベゴニアのスタンドタイプとハンギングタイプを両者とも駄温鉢に植え、スタンダードに仕立てて展示した。また、頭上からは球根ベゴニアハンギングタイプを約120鉢吊り下げた。更に、やすらぎ広場中央には花ポールを置き、11~12月の間はエラチオール・ベゴニアと冬咲きベゴニアによる装飾を行った。

2 育苗室

展示室からガラス越しにみることができる育苗室は、9台の移動式ベンチを備えている。ベンチ上では球根ベゴニア、木立ち性ベゴニア及び育てにくい原種を、またベンチ下では主に根茎性ベゴニアを栽培している。

また、育苗室内には約2℃に維持した冷蔵庫(3.3m²)を設け、休眠した球根の休眠打破と種子貯蔵に利用している。

なお、展示室から育苗室を見る際の参考として、ガラス面に球根ベゴニアの栽培法と組織培養の育成過程についての解説図を張り付けた。

3 室内環境とそれに伴う植物の生育状況

温度・湿度

主に6月上旬から9月中旬までは、昼温を22.5℃、夜温を16.5℃に設定し、水冷式パクー

ジ形空調機により冷房を行った。一方、10月上旬以降冬の間は、昼温を23.5℃、夜温を16.5℃に設定し、真空式給湯暖房温水器により暖房を行った。しかしながら、実際には、夏季期間はやすらぎ広場が、また冬季期間は球根ベゴニアコーナーの上段が目標温度よりも7～8℃高温気味に推移した。そこで、夏季期間は、やすらぎ広場に設置されている温度センサーを基準にして冷房温度を設定し、全体としては若干低めに温度を維持した。また、冬季期間は、球根ベゴニアコーナー上段の送風口を完全に閉じて、この付近の温度が著しく上昇しないようにした。

湿度については、冬季に乾燥しすぎる傾向がみられた。これは温風暖房の影響と思われる。特に、球根ベゴニアコーナーの上段では、展示していた球根ベゴニアの葉が黄化して枯れ上がり、株が著しく損傷するという被害が生じた。そこで近くにある送風口を閉じるほか、床への打ち水や葉水といった栽培管理で対処しているが、その効果は芳しくなく、今後の対策を要する。

照度

夏季には、備え付けの内張りの遮光カーテンを張ったが、それにもかかわらず強光により球根ベゴニアコーナーの植物で葉焼けが発生した。そこで、このコーナーの上部にあるガラスの外側に黒のダイオシート（50%遮光）を張り、更に遮光を強めることによって、この問題を回避した。

一方、冬季になると、室内全般で照度が低下し、球根ベゴニアにおいては、一部で生育が阻害されたり、休眠に入る傾向がみられた。今後、補光設備や植物の配置について検討する必要がある。

日長処理

球根ベゴニアは長日植物であるため、周年にわたって開花させるには、秋以降の短日時に電照による明期の延長が必要となる。ここでは、午前3:00～7:00と午後4:30～8:00の2回に電照を行い、日長を17時間にしている。

ところが、育苗室の一部及び展示室の植物公



写真3 球根ベゴニアコーナー

園オリジナル品種コーナーと組織培養コーナーにおいて、電照の光が不足した。そこで、白熱灯（60W）をそれぞれ6灯及び10灯取り付けた。

4 年間管理

球根ベゴニアについては、スタンドタイプとハンギングタイプを約100粒程度、それぞれ1もしくは2ヶ月に1回播種している。また時期によっては、掘り上げた球根を冷蔵処理し栽培に供している。木立ち性ベゴニア及び根茎性ベゴニアについては、それぞれの生育状況を見ながら、剪定、挿し木及び植え替えを行っている。

施肥は、生育状態の良好な時期のみ、液肥（N = 1.2ppm, P = 2 ppm, K = 2 ppm）を週1回程度施している。

また、病害虫駆除として薬剤散布を月に1回程度行っている。殺菌剤、殺虫剤、殺ダニ剤を混合し、1回に約450ℓの薬量を使用している。

球根ベゴニアの組織培養については、夏季に汚染がひどく発生し、培養苗の大半が枯死してしまった。現在は、汚染から免れた系統を展示及び増殖する一方、冬季に新たに他の系統を取り込み、培養している段階である。今後は、外植体を取り入れる時期とより確実な殺菌方法について再検討し、それらの結果を踏まえて、展示のための周年供給体系の確立を目指すつもりである。